博士論文審査及び最終試験の結果

学位請求者　　木部敬
学位請求論文　　『グスタフ・シュペートにおける言語と文化の哲学の構想』

審査委員（主査）　亀山郁夫　印
（副査）　高橋清治
鈴木聡
柴田勝二
御子柴道夫

《論文の概要》

木部敬氏による論文『グスタフ・シュペートにおける言語と文化の哲学の構想』は、20世紀ロシア言語文化哲学の隠された原点ともいうべきグスタフ・シュペートの初期著作の読解にもとづき、西欧の経験論哲学、心理学、現象学に連なる認識の学との対比を通して、近代の西欧哲学が自らの歴史のなかで培ってきた二元論を打破し、新たな認識論の地平「開かれた場」の発見へといたるまでの思索のプロセスを詳らかにした論文である。木部氏は、西欧近代の哲学において増幅の一途を辿りつつあった懐疑論を克服し「真に存在するもの」を明らかにせんとする数々の哲学者の試みを一つ一つ総括しつつ、ロシアにおけるそのケーススタディとしてシュペートを研究の対象に選んだ。

概要は以下の通りである。

近代の西欧哲学は、「真に存在するもの」の探求に懐疑的なまなざしを向けてきた。その懐疑のありようはもはや修復不可能とさえ思えるほどに徹底したものであった。「幻影としての世界の囚人」たる近代人の懐疑的知性は、「真に存在するもの」を消去し、世界を幻に変えた。しかし、万人に共通のものである「自然な感覚」として世界には確固たる「実在性」が備わっている。この感覚にリアリティを与え、懐疑に打ちかつには「まったく新しい真の存在」の発見を志すよりほかない。この試みは19世紀後半の帝政ロシアにも波及していった。帝政時代は、西欧の近代思想全般が危険視されたが、その陰で、近代の懐疑をみずからの問題として受け止めようとする哲学者が現れ、19世紀末から20世紀初頭にいたってその試みは一定の成果を収めるようになった。そのもっとも輝かしい一人が、グスタフ・シュペートだったのである。

シュペートは、西欧の諸哲学との対話と批判的検討を重ねながら、最終的にはフッサール哲学との対決（『イデーン』批判）を通して、新たな認識の地平へと歩みだす。すなわち、意識の本質を記述する際にフッサールが呈示した図式「主（私）――作用（見る）――客（対象）」ないしは「有心的自然（意識）――物理的自然」の克服である。シュペートは、

この図式化の試みそのものを取り払い、その後に現前する「開かれた場」をこそ、「真に存在する」ものと結論づけた。シュペートによれば、それこそはまさに「社会的存在」（フッサールはそれを「精神世界」と呼ぶ）に他ならないのだが、この「社会的存在」とは、フッサールのとらえる「有心的自然―物理的自然」の基底にあるもの、いや基底そのものであるという。そしてその基底を、シュペートは、他と連繋し、他を必要とする「道具」の概念によって説明づけようとしたのだった。道具は、孤立しては存在しえず、単独的、孤立的ではありえない。このような理解の延長上で、シュペートは、人間の身体による知覚、さらには記憶力、想像力、思考力などの及ばない地平に「真に存在するもの」、「社会的存在」の典型とされるものを「他者の言語」、「他者からの伝言」とみる。端的に言うなら、この「社会的存在」こそが言語であり、言語によって形成された文化である。木部氏の論文では、シュペートが上記の結論へといたる思考プロセスを克明に記述することに最大の重心が置かれている。

なお、この点をめぐる方法上の問題性については、下記の《検証》を一読願いたい。

《論文の構成と内容》

本論文は、序、第１部、第２部、結論からなっており、巻末にはシュペートが自らの哲学の概略を記した文章（翻訳）が付録に収められている。第１部は、世界のみならず本国ロシアでもほとんど端緒についたばかりのシュペート研究の空白を埋める目的から、略伝、先行研究の紹介、時代区分、思想の全体像が祖述される。本論への導入ともいうべきこの部分で、木部氏は、従来、Ａ・ハールトの先駆的研究が行った時期区分に対する見直しを求め、全３期からなる新たな区分を設定した。この区分法は、シュペート哲学の全体像をどうとらえ、さらにはどの部分を主として論じるか、という本論文の問題意識の根幹に結びつくものであるので、以下そのあらましを紹介する。

＊ハールト　①　1898－1905　　②　1906－1912　③　1913－1931

＊木部　　①　1901－1910　　②　1910－1916　③　1917－1929

木部氏による新たな時代区分において注目すべき点は、それぞれの時代区分に、①　修学期、②　構想期　③　展開期という名称が与えられていることである。また、この区分は、シュペート哲学の展開を２段階的な深化のプロセスとして捉えることをも暗示している。ただし、この区分が、本論文を構成する上での一種の便法と捉えられかねない危うさを含んでいるため、以下に述べるように、審査委員会ではその点への注意を怠らないように努めた。

シュペートは、人間の世界認識をめぐる根源性の問題に取りつかれた哲学者であった。それゆえ、現象界の認識をめぐる近代西欧哲学のほとんどすべてが彼の関心の的となった。本論文の核心となる第２部では、ヒュームに始まり、ヘルヴァルト、ヴント、ブレンターノ、シュトゥンプ、ウィリアム・ジェームス、ディルタイ、フッサール等、西欧における

懐疑哲学の系譜とシュペートがとらえる経験論哲学、さらに心理学、現象学が分析と批判の的となった。ここで注意しておきたい点は、対象の解析という営みそのものが、じつは対象の批判と表裏一体をなしていることである。そして最後にはフッサールが、シュペート哲学の独自の個性を浮かびあがらせるカウンターパートとして浮かび上がる仕組みになっている。以下に掲げるのは、本論文で考察の対象とされた著作である。

①「修学期」

「ヒュームとカントにおける因果性の問題」(1907)

②「構想期」

「ヒュームの懐疑論と独断論」(1911)

「心理学の一つの道、それはどこへ通じるのか」(1912)

『現象と意味――根本学としての現象学とその諸問題』(1914)

『論理学の問題としての歴史――批判的および方法論的研究』第1巻:(資料 1916)

シュペートは、自らの哲学的出発点を、ヒュームの認識論的な懐疑との接触によって初めて意識することになった。そもそもイギリス経験主義が目ざしたのは、人間の知性が及びうる範囲を見定め、形而上学の伝統に終止符を打つことにあった。その試みを要約するなら、人間の知性には限界があり、際限なき知性という前提に立つ形而上学的探求は無効であるとする考えである。シュペートは、以下のような論法によってヒュームの懐疑論者としての出発点そのものを否定する。すなわち、ヒュームは伝統的形而上学の独断論に対する疑念から懐疑論を打ち出したが、懐疑論はいずれその独断性ゆえにすべての否定へと向かわざるを得ず、いずれこの全否定から逃れるために、懐疑論はどこかで肯定論と折り合いをつけなければならない、というのである。シュペートによれば、カント哲学もまたヒュームの懐疑論を避けつつ、独断論(悟性の肯定)へと転じたにすぎなかった、つまり、ヒュームの懐疑は、カントによって解決されなかった。シュペートはこのジレンマを検証するため、その後、ディルタイ、ジェームス、ベルクソンらの「生の哲学」へと視点を移動させ、そこに、「すべての肯定」という発想の源を見出すことになる。

第1部第2章における「心理学の一つの道、それはどこへ通じるのか」(1912)では、経験主義的な心理学(ヘルバルト学派、連合主義、感覚主義)、実験心理学(ヴント)、「要素主義」(ないし「原子主義」)、さらにはブレンターノ(「心的現象」と「物的現象」)、ヴュルツブルグ学派、シュトゥンプを分析と批判の俎上に置く。シュペートがみずからの確立のために最終的な相手としたフッサールについては、同第3章「フッサール現象学との対決と言語と文化の哲学の構想」で詳しく検討される。この章が本論文でもっとも重要な部分となる。シュペートはフッサールを批判的に検討する『現象と意味』(1914)において、フッサールの代表的著作の一つ『イデーン』の逐次的な解説という手法を選び、この作業を通して、みずからの言語と文化の哲学を確立するにいたった。

ここは、結論のみを紹介することにする。

フッサールは、意識の本質を記述する際に、「主（私）――作用（見る）――客（対象）」という図式つまり「有心的自然（意識）――物理的自然」としてこれを図式化した。シュペートがそれに対して抱いた疑問とは、主客対立の図式と、それに基づく直観イメージに固執したまま、果たして「真に存在するもの」の認識という謎を解明できるか、ということにあった。シュペートはそこで、「《私》が対象そのものを見て取る」という想定を、根本から取り去ってしまう。木部氏によると、フッサールは意識を閉ざされた箱や袋のようなものと考え、なおかつ、《私》が箱ないし袋の外に超出するとはどういうことかを問うていた、しかし、それは問いそのものが間違っていた、ことになる。それに対し、シュペートはそれらの袋なり、箱なりが破れ、それによって開かれた広大な場として意識をイメージしていた。いや、そのように、内と外とを分け隔てること自体を停止させようと試みたのである。そして、この図式化を取り払い、取り払われた後に現前する「開かれた場」、それこそが「真に存在するもの」に他ならないという。では、その「真に存在するもの」とは何か。シュペートはそれを「社会的存在」と呼ぶが、それは、フッサールのいう「精神世界」とは異なるものである。シュペートによれば、この「社会的存在」とは、むしろ「有心的自然―物理的自然」の基底にあるもの、いや基底そのものである。シュペートはさらに、その《基底》となる「開かれた場」を、他と連繋し、他を必要とする「道具」の概念によって詳しく説明づける（「道具が道具であるためには、全体的な連関に置かれることが不可欠である」）。道具は、孤立しては存在しえない、すなわち、単独的、孤立的ではありえない。このような理解のもとに、シュペートは、すべての認識の対象を他の対象との連関のなかで初めて何かたりえる、と考えるのである。人間の身体による知覚や記憶力、想像力、思考力の及ばない地平に「真に存在するもの」、すなわち「社会的存在」の典型とされるものとは「他者の言語」、「他者からの伝言」、すなわち、それこそは言葉であり、言葉によって形成された文化である。この結論は、シュペートの結論であるが、それは同時に木部氏が本論文の結論として提示するものでもある。すでに述べたように、本論文の特質とは、シュペート論文の徹底した読解を通して、その哲学の核心を析出することにあった。木部氏は結論部においてシュペートの認識の根源に触れながら次のように書いている。「言葉とは、全体的連関であり、何かが存在するとは、この全体において自身の役割ないし使命を果たしていること、そうした全体の中に位置づけられているということである」。「真に存在するもの」としての言葉の発見とともに、シュペートは、その後、『美学断章』その他の代表的な著作へと向かうのである。

《検証：方法論をめぐるいくつかの問題点》

審査委員会は、「シュペートにおける言語と文化の哲学の構想」と題された論文の方法論に詳しく立ち入ることになった。なぜなら、本論文のもつ性格と独自性はその方法論と決して切り離しては考えられないからである。新しい学説の紹介が一個の論文として成立す

るには、まず、手続きそのものの正当性が問われなくてはならない。

これから何度か言及することになるが、木部論文の大きな特長は、難解をきわめるシュペートの言語哲学を紹介するに際し、彼自身の発見・洞察を重ねあわて記述するという解釈学的な方法にある。シュペートの哲学が「開かれた場」の誕生へといたる生成のプロセスを、自分なりの言葉で咀嚼し、パラフレーズしようという姿勢である。

一例を挙げる。たとえば、最初の引用（57－58 頁）で登場する「エウテュデモス」（プラトン）の喩えは、原文を一読しただけではよくわからない。だが、木部氏が、その後の引用（58 頁）中の「心理学と形而上学は血を分けた姉妹である」というシュペートの一文を念頭におきつつ、原文にはない「母と子」の比喩を出すとき、その意味するところは、俄然分かりやすいものとなる。哲学者の言説を、具体的かつみじかなイメージに還元し、咀嚼しなおしたうえで自分の言葉で表現し読み手を納得させるという作業は、思想研究にとって根本的で初歩的なものであるとはいえ、本論文が、シュペート哲学のパイオニア的かつ本格的紹介として持っている意味は、こうした方法的側面からみても、計り知れず大きいといわなくてはならない。

しかし、そこでわれわれの関心を引くのは、著者の発見的なパラフレーズや洞察の記述によって、シュペート自身の思想が歪曲されて紹介されていないかという疑問である。木部氏自身も、みずからの方法論がはらみかねないそうした危うさを弁え、十分な警戒心を持って臨んでいる。本審査委員会は、木部論文の内容（とりわけ結論の有意性）とその方法論が密接に絡み合っていることを踏まえ、原文との参照を行い、その当否を見極めることにした。たとえば、「哲学と心理学」（2－1）の節で、木部氏は、シュペートが哲学を（あるいは形而上学）存在論と考え、心理学を認識論と考えていたと書いている（58）。果たしてその理解は正鵠を射ているのだろうか。シュペート自身、みずからの哲学の本質を、西欧近代の哲学に貫流する懐疑を超克する「真に存在するもの」の追求と規定している以上、前者の定義に疑義を挟むことはできない。では、後者の、心理学を認識論と考えたとする点はどうなるのか。たとえば、シュペートは「形而上学は実在（□□□□□□□）の認識を自己の目的として立てながら、経験的な基盤に依拠せねばならず」「心理学は抽象的な諸関係を措定する場合でさえ、それらの関係を具体的な実在から引きださねばならない」と書いている。この点から見ても、心理学を認識論と解釈する見方は決して誤っていない。シュペート自身の記述をさらに丹念に読み込んでいと、「心理学が心についての学問から魂の諸現象についての学問へと変化した」とするくだりがあり、木部氏の見解が少しも的を外していないことが明らかになる。

本論文は、原文の読みを通してたどり着いた結論を先に提示し、そこから仕切り直しする形でシュペートの哲学を解説するという手順を踏んでいる。そのため、シュペートの記述と同時並行的に論じてゆくと断ってはいるものの、時によっては読み手に先見を与えるかのような、ないしは主観的な仮説の提示といった印象を与えているる。本来であれば、

論文作成の方法としては瑕疵とみなされるべき部分かもしれない。しかし、本論文では、逆にそのスタイルが、木部氏の読みの確かさを裏付ける一つの重要な証となっていることが明らかになった。

シュペートは書いている。「心理学における新しい道は、哲学の復活である。現実的なもの（□□□□□□□□□□□□□□）、真に実在的なもの（□□□□□□□□）に対する自己の権利を形而上学に取り戻させねばならない。心理学における新しい道は、形而上学にとって新しい展望をも開示する。形而上学の直接の課題は、現実を、その真の本質と統一性（□□□□□□□□□□）において認識することであった。心理学の新しい道が私たちをリアルに現実的なもの、統一的に（□□□□□□□□）に現実的なものへと導くかぎり、再び心理学と哲学の自然のつながりがあらわになる…」（259 頁）。木部氏によると、この「心理学における新しい道」をシュペートはディルタイの記述心理学に見出したと考え、よってディルタイ（の「生の哲学」）の説明にかなりの記述を割いているが、そこまで断じることが可能かどうかともかくとして、このくだりには、シュペート哲学における思索の根源とでも呼ぶものがうかがわれ、木部氏の研究前提――シュペート哲学は真に存在するものへの追求であり、だから存在論である――を確認するものとなる。

以上、木部氏の方法論に批判的な検討を加えたうえでその妥当性を明らかにした。

《公開審査の概要》

2005 年 8 月 26 日午後 2 時より、総合文化研究所で行われた公開審査では、冒頭で木部氏に対し、およそ 30 分にわたる本論文の概要についてプレゼンテーションを求めた。その後に続いた、およそ 2 時間に及ぶ質疑応答での木部氏の応答はきわめて緻密かつ論理的に明晰であった。議論の中心となったのは、シュペートが受容し経験した西欧哲学の内実についてである。木部氏は、シュペートの哲学的論争相手を、経験論哲学、心理学、現象学に限定しているが、果たして欠落はないか、との問いであった。シュペートがカントに対して否定的であったことは十分に理解できるが、たとえばヘーゲルに対する理解はどうであったのか、あるいはハーマンやヤコービといった信仰哲学者は影響を与えなかったのか、等の疑問である。

次に、シュペートにおける影響関係および受容を（土俵外での議論となる恐れがあったが）、シュペートに先行するロシア思想、すなわちソロヴィヨーフ、ユルケーヴィチ、セルゲイ・トルベツコーイ、ロパーチンからの影響の土壌で考えられないだろうか、という質問が出された。言い換えれば、19 世紀後半以降のロシア哲学の系譜の中で位置づけるという作業なしで、シュペート哲学の全体像を描くことは可能か、ということである。また、20 世紀初頭のロシアの象徴主義に現れた終末的かつ黙示録的な世界観との類比、あるいはバフチン哲学における「カーニバル論」の視点との比較が問題となった。シュペートのイメージする「開かれた場」の歴史的位相を誤りなく提示することは可能か、という疑問で

ある。

また、ある審査員からは、次のような意見が寄せられた。

一読したところ、難解をきわめ、論旨も辿りにくい面がないではないが、論理の筋道は決して不明確ではない。木部氏の手法は、シュペートがフッサールの『イーデン』を解説した論文そのものの方法を真似ており、むしろそれは格闘の足跡と呼ぶにふさわしい観を呈している。現象界の認識を、ロック、ヒューム、ヴント、ブレンターノ、シュトゥンプ、ジェームス、ディルタイ、そしてフッサールの認識論ないし現象学との対決としてとらえ、主客二元論からの脱却を、言語と文化を規定とする新たな「開かれた場」へと開放した点にその特質をみる主張は、シュペート以後の言語哲学研究、記号論、文化研究に大きな示唆を与えるものである、等々。

また、本論文は、上記の西欧哲学の流れを咀嚼し、あくまでも自分自身の言葉で語りきろうという強い情熱に満ちていてたいへん好ましい。所々、トートロジカルな記述がないではないが、むしろその「反復性」こそ、木部氏の思考そのもののうねりを示すオリジナリティの証である、との意見もあった。

また、別の審査委員からは次のような意見が出された。

内容的には、ヒュームやフッサールが、意識や知覚がとらえうる限りでの世界の存在を追求したのに対し、シュペートがこの構想期の段階ですでに、内と外の区別を消滅という認識の次元を「文字通りすべてが皆、まったく何の差別もなく、真に存在する」(99) としていることについて、そうした混沌の世界においては、もはや「真」も「偽」の差異も消滅するのではないか、また、そこでは外界を把握する人間の意識の機能はどのように措定されるのかという疑問である。また、ハイデッガー、メルロー＝ポンティ、あるいはラカンらの哲学との対比を視野に収めながら、20 世紀哲学全体に関わる文脈のなかでシュペートの歴史的意味を浮かび上がらせる努力も必要ではなかったか、との指摘がなされた。

また、別の審査委員からは、「開かれた場」としてイメージされている「真に存在するもの」の、次のステージにおける展開が見えてこないとの不満が出された。

木部氏が、それらの一つ一つの疑問に対して、完全に明晰に答えることができたわけではない。その質疑応答の内容を詳しく記す余裕はないが、木部氏は自分が提示した枠組みにしたがって、上記の質問に対してきわめて明快に対応した。また、木部氏がすでに修士論文において初期バフチンの徹底読解を試みている事実を踏まえ、本論文がけっして 20 世紀的な問題意識に背を向けているわけではないことも明らかにされた。しかし、もとより、木部氏が本論文で提示しようとしたのは、あくまで西欧近代の哲学との格闘のなかから立ち現れるシュペート哲学の独自性であり、審査委員による上記の疑問点がいかに本質的な内容を含むとはいえ、本論文の枠から多少とも反れる問いかけであったことも疑えない。いや、そうした疑問を誘発するほどに、木部氏によるシュペート哲学の解明は、学問的に刺激的な意味を帯びているということでもある。

《論文審査及び学力の確認の判定》

改めて繰り返すことになるが、本学位請求論文は、20世紀ロシア言語文化哲学の隠された原点ともいうべきグスタフ・シュペートの初期著作の読解にもとづき、西欧哲学における経験論哲学、心理学、現象学との対比を礎にしつつ、その哲学の独自性を明らかにした論文である。一言で言って労作である。シュペートが、二元論の枷に囚われつづける西欧の認識論に抗いつつ、「開かれた場」という新たな地平へと誘い出していく思考プロセスは、まさにドラマティックの一言に尽きる。その哲学が、将来における構造主義、記号論への道筋を暗示している点でも木部氏が本研究で果たした役割はきわめて大きいと言わなくてはならない。審査員一同、本論文が、わが国のみならず、世界におけるロシア思想史研究、ロシア言語哲学史研究にパイオニア的な意味をもつと判断し、博士（学術）を授与するにふさわしい研究であるとの結論にいたった。

以上